研究編

東京音楽大

ぶら～りキャンパス

近隣民族の音 生かす

民族音楽研究所

住宅街にある東京音楽大学本館。民族音楽研究所までは歩いて3分＝豊島区で

「当時はまだアイヌ民族の音楽の資料が乏しかった時代。北海道で数少なくなった演奏者を訪ね、お話を聞いたり、演奏を録音したりしました」

東京音大付属民族音楽研究所で一九九〇年代に本格化したアイヌ音楽の研究を、甲田潤専任研究員が振り返る。トンコリという弦楽器の発掘が典型的。アイヌの間でも忘れかけられていた存在だったが、「知床の民芸品店に飾られていたものを見つけ、旭川の製作者を探して復元していただいた」。研究自体が音楽の保存活動にもつながっている。

研究所は、映画「ゴジラ」の音楽を担当し、後に東京音大の学長になる作曲家の故伊福部昭氏らが七五年に開設。音楽大の学生のほとんどがクラシックなどの西洋音楽を学ぶ中、北海道出身の伊福部氏が影響を受けたアイヌ音楽などの研究を掲げた。アジアなど近隣諸民族の音楽を調査することで、「音楽の世界での日本の立ち位置を知る」ことを目的とする。

その後、対象は琉球の音楽や邦楽にも拡大。沖縄では、楽譜がない曲を五線譜に表すことを試みた。仏教の声明（しょうみょう）の研究に取り組んだ甲田さんは「欧州の合理化された音楽と、精神的なものに基づく声明の違いに気付きました」と話す。

学生に対しては八〇年から、インドネシアの伝統音楽「ガムラン」の授業を行ってきた。ほとんどの学生は楽器に触るのも初めて。オーケストラのような指揮者がおらず、演奏者同士でリズムを合わせる奏法に驚く。六月の授業で、鍵盤が七つしかない楽器で演奏した植平杏奈さん（二年）は「ピアノは八十八本もあるのに…」と表現力の奥深さに興味を持った。長谷川愛理さん（同）も「響きやリズムをクラシック音楽に生かしたい」と意欲を見せる。

民族音楽研究所でガムランの授業を受ける学生たち＝豊島区で

インド音楽の授業では、弦楽器シタールの奏法などを教えている。ここでも、学生たちは積極的。小日向英俊講師は「作曲を学んでいる学生は、創作のアイデアを求めている。民族音楽を生かした創作音楽を作る学生もいます」と話す。

研究所は社会人向けにも、トンコリや二胡（にこ）、馬頭琴などの講座を開講し、研究の成果を還元してきた。さらにジャンルを増やす方針だ。

これまで世界各地で集めた民族楽器は数百点。伊福部氏がのこした中国の明・清時代の楽器も含め、どれも修復を重ねながら学生や社会人の指導に使われている。「博物館ではないので飾っているだけではいけない。まずは弾いてみよう、たたいてみようということです」と甲田さん。音楽大学という場所だからこそ、楽器にも生命が吹き込まれている。

（橋本誠）

東京音楽大学　1907（明治40）年創設の東洋音楽学校が前身。当初からオーケストラ教育に力を入れ、78年以降は管弦楽団、吹奏楽団、合唱団などを世界各国に派遣。在学生を中心とする東京音大シンフォニーオーケストラは米国、中国、ドイツ、オーストリアなどの計30以上の都市で演奏会を開いている。声楽、器楽、作曲指揮、音楽教育の４つの専攻があり、2013年度の学生数は1472人。大学院や付属の高校、幼稚園もある。